

かつて東京・埼玉連続幼女誘拐殺人事件と呼称された事件があった。被害者は4歳から7歳までの女児であり、犯人は報道機関に犯行声明を送りつけ、野焼きした女児の遺骨を遺族に送りつけるなどの異常行動を取っていた。その後、強制わいせつ事件で現行犯逮捕された被疑者・宮崎勤氏が幼女殺人に関する秘密の暴露に該当する事実を供述し、その供述どおりに女児の遺体が発見された。その際、ほとんどのキー局がこぞってカメラを回し続け、宮崎勤氏の自宅に捜索差押えに向かう数多くの警察官をヒーローでもあるかのように映し出していた。

その後、宮崎勤氏がロリコン・ホラーマニアであると報道されると、同様の個人的趣味を持つ人間に対する強い偏見を醸し出すような報道が続いたばかりでなく、女性の乳首すらマンガで描写できないほどのクレームが殺到した。そのような中で、宮崎勤氏の両親や姉妹2人兄弟2人には「殺してやる」「お前たちも死ぬ」という嫌がらせの手紙が殺到し、世間からの宮崎勤氏の

家族に対する憎しみが日々繰り返される報道を通じて増幅されていった。その後、長女、兄弟、実母の兄の息子ら2人、実父の弟などがいづれも会社から退職を余儀なくされたり、婚約を破棄せざるを得なくなつた。さらに、娘2人に「宮崎」

姓を捨てさせるために妻と離婚をせざるを得なくなつた親戚もいた。地方の都市における犯罪者の家族というものが罪を犯した宮崎勤氏以上の苦しみを味合わざるを得なかつたのである。宮崎勤氏が逮捕されてから4年後、その実父は亡くなつた被害者の遺族らに対する幾ばくかの示談金に用立てようとして自宅を売る段取りを終えると、多摩川にかかる橋から飛び降り自殺をした。

ところで、平成28年2月2日、元プロ野球選手であつた清原和博氏が覚せい剤取締法違反で逮捕された。元妻・清原亜希さんは、子どもら2名を引き取り、子どもらが一番大切だと言つて気丈に仕事に打ち込んでいたが、その真偽は不明であるものの一部報道によれば、企画として進んでいた仕事が一且保留に

なつたり、数多くの女性ファッション誌の広告主から、今後の起用を見合わられたり、見直しを求められたりしているとのことである。

刑事弁護人をしていると、担当する被疑者・被告人の犯した罪にはさまざまな犯罪があることが分かる。弁護士は、被疑者・被告人のための情状を考察するにあたり、各人の生育歴などを振り返ることも多いが、介護疲れを理由とする無理心中などの一部の犯罪類型を除外すれば、よほど特別な境遇や事情がない限り、成人に達した被疑者・被告人が罪を犯した理由として家族関係が原因となることはないと思う。仮に犯罪の遠因になつていのではないかと頭の中で考えても、具体的な且つ説得的な理由にはならないことが多い。家族の中に犯罪を犯したり、犯してもおかしくないような状況があることについて無関心な家族もいるが、悩み続けている家族もある。何らかの具体的なアクションを起こすことができないまま、日々忙しく仕事に追いまわられている中で、ある日、家族の一員が罪を犯して逮捕された事実を知つて深く傷つき、

その後、周囲からは偏見の目で見られ、よそよそしい態度を取られる状況下で、下を向いて生活を続けなければならぬ事例も多い。

罪を犯して逮捕・勾留されている者の家族に対し、私たちは、1人の市民として、また、社会人としてどのように接すればいいのであろうか。刑事弁護人としての立場を離れて考えた場合、私もどうすべきかの言葉を失うかもしれない。しかし、はっきりしていることは、宮崎勤氏の家族に脅迫文を送りつけることではけつてないし、被疑者・被告人の親類・縁者に至るまで退職や離婚に追い込むような風潮に手を貸すことではない。言うまでもなく、スポンサーが清原亜希さんの仕事を一旦見直すことでもないし、「清原」姓を変えていないから仕方ないなどと名字に拘る抽象論をまくし立てることもない。犯罪者の元家族を広告に使うことが世間や収益にどう関わるのかということを考えることもあるのであるが、短期間、関心を装う一過性の集団に変貌する世間体など気にすることはない。過剰反応化社会はまだ続いている。

## 法律談 40 法相 R

## 犯罪者の家族に対する世間の冷たい目

高橋 司 たかはし・つかさ

弁護士。1963年生まれ。北海道大学大学院法学研究科修了。「高橋日浦法律事務所」代表。